

小泉八雲のことども(続き)

根本重熙

(小泉八雲の訳数首)

お前百まで わしゃ九十九まで、  
ともに白髪しろがみが生えるまで。

You, till a hundred years; I, until nine and ninety;  
Together we still shall be in the time when the hair turns white.

神代このかた変らぬものは、  
水の流れと恋の道。

Things never changed since the Time of the Gods;  
The flowing of water, the Way of Love.

お前死んだら 寺へはやらぬ、  
焼いて粉にして 酒で飲む。

Dear, shouldst thou die, grave shall hold thee never!  
I thy body's ashes, mixed with wine, will drink.

関の五本松 一本切りゃ四本、  
あとは切られぬ夫婦松めおとまつ。

Of the five pines of Seki one has been cut, and four remain;  
and of these no one must now be cut, — they are wedded pairs.

君と別かれて松原行けば、  
松の露やら 涙やら。

Parted from you, my beloved, I go alone to the pine-field;  
There is dew of night on the leaves; there is also dew of tears!

かぎりあれば けふ脱ぎ捨てつ藤衣、  
はてなきものは 涙なりけり。

Since customs hath limited the time of mourning, my mourning  
garments must be laid aside, but my tears never can be laid aside.

熊本とハーンえにしの縁 (参考文献：小泉八雲全集(第一書房)；広瀬朝光著、小泉八雲論)

1891年(明治24年)に、ハーンは、東京文科大学教授、バジル・ホール・チェンバレンに、手

紙を出して言う「ご病気にて大いに苦しんでおられるにも拘わらず、絵葉書をお送り下さいまして、そのご親切に対して、わたくしは、大いに感動しました。そのお礼は何れ後日申し上げたく思います。わたくし自身も、実は目下大病をわずらっています。風邪には免疫だなどと高言したのは、余りに早計でありました。自分から最も強健だと思っていた部分—この肺に、大きな打撃を受けまして、既に数週間も床中に呻吟しております。このように病気で悩まされてしまつては、元気もなにもあったものではありません。こんな冬が、もう二つ三つやってくれば、わたくしは、地下の人となるだろうと心配しております。でも今年のような厳しい冬は、非常な例外的なことだということです。初雪でさえ、わたくしの家のあたりは、五尺もつもっています。湖水に臨み、杵築に面しておつてさえ、これほどであります。山という山はみな白くなっております。国中はみな白雪で埋められています。風は非常に厳しいです。わたくしは、アメリカ合衆国でも、カナダでも、これ以上に猛烈な雪を見ませんでした。寒暖計は、あなたがご想像になるほどには低くありません。氷点下約12度より下ることはありません。しかし家の中は、家畜小屋のように寒くて、火鉢も、こたつも、ほんの火気の影、幽霊、幻影のようなものに過ぎません。しかし、今青空が見えております。明日になったら、おそらく、すべてのものが、再び愉快になるでしょう。

当局者は、わたくしに対して、驚くほどに深切にしてくれます。もし、この親切がなかったらわたくしは、何をしていたのか、自分ながらわかりません。わたくしは、あなたはすでに、ご壮健な体になられたことと信じています（以下略）

ハーンの本郷への転勤を斡旋してくれたのも、同教授であった。

明治24年10月1日の教授の手紙（筆者注：前掲のハーンのものへの返信らしい。）にいう。

月200ドルの職場が得られそうだと聞いたので、冬の気候はよいところだし、この機会を逃がしてはならないと思って一筆したためます。もちろん他にも希望者があることです。あなたが、肺臓のことを云々しなかつたら、こんなことをいってやるのではないが。ともかく、こんな場合、機会を失つてはなりません。

明治24年10月4日（同教授から）  
二三日前の手紙のことですが、熊本高等中学校校長嘉納氏（筆者注：同校三代目校長嘉納治五郎）が、英語教師の職をあなたに提供したいと、いっ



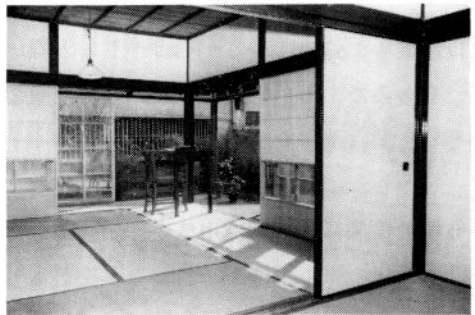
小泉八雲熊本旧居

記念碑は白と杵をあらわしハーンのリリーフが見られる。



南側から見た同旧居

ておられます。月給は200ドル。住宅の心配はありません。ただし、旅費は含まれません。一日五時間以下の授業。もちろん、日曜日は休みです今月末に来ていただければ、向うの当局者は好都合です。もっとも、そのポストは数ヶ月間つまり本年度末まであけておくことができます。現在の先生、(筆者注：克蘭ミー氏といい同校初代外人教師。ハーンは、松江時代と同じく熊本でも二代目の外人教師となる。前任者は、ものの本によると、六尺七八寸以上の堂々たる巨人であったということで、片や、ハーンは前述の通り、五尺一寸の小兵であったが、ハーンの方が雄弁であったとのことである)の契約期間は5月7日までですが、あなたの場合は、あなたさえよければ、期限を切らないで更新されることは、ほぼ確実です。あらゆる契約が短期間で切れてしまうのは、どうも、なみの人にとって、議会が安心ならないからです。わたくしは、嘉納氏に対して、あなたに関して知っていることを全部話しました。もちろん最終的には、文部省がきめることですが、嘉納氏は、ぜひ、あなたに来てもらいたいと、考えています。よく考えてあなたの意志を嘉納氏にお知らせ下さい。嘉納氏は気持のよい人で、アジア協会その他に属しておられます。



同旧居の室内の一部

近眼のハーンのために普通より高く作った机がある。またハーンが朝晩参拝した神棚も保存されている。

どうか、友人としてお願いしますが、この申出を、むげに断わらないで下さい。ちがう意味ですが、出雲に劣らない面白い日本の一部でしょうから。気候はよいし、旧日本の中に居ることになるでしょう。要するに、健康には現在のところよりはよいし、また、これからあなたは出版なさるでしょうが、その本の価値を高めることにもなりましょう。

以上の内容の手紙を受けとったハーンの喜びはどんなであったらうか。最大関心事である寒気のことには熊本へ行けば一挙に解決するのではなかろうか、その他にも、出版に好都合であること等々。手紙の中に述べてある事柄の何れも、文句のないところで、これならば、熱愛の地松江に訣別するのにも未練に思うこともないであろう。ハーンの心の中では、期待が大きく脹らみはじめていたことであろう。セツはハーンの性質を評している。「面白い時には世界中が面白く、悲しい時には世界中が悲しいという風でございました」と。平易な表現で夫のロマンチスト的片鱗を透視している。

#### 熊本におけるハーン 熊本—その所と人と—

さて前述のような経緯の後、心も軽く、新しい抱負をもって、新任地へと乗り込んだであろうハーンを追体験して見たいものと思う。可能であるならば。

彼の著“東の国から”の中の“九州の学生”から抜粋してみる。

熊本の学生が自分に与えた印象は、出雲の生徒と始めて相知って受けたのとは、非常に違って

いた。これは、熊本の学生が、日本人の少年時代の甚だ愉快な時期を既に経過して、真面目な無口な成年に達しているからばかりではない。また一方では、いわゆる九州<sup>かたぎ</sup>氣質を著しく代表しているからである。九州は昔のごとく今日でも、日本の最も保守的な地方となっている。そして、その主要な都の熊本は保守的精神の中心となっている。

しかし、この保守主義は、合理的でまた实际的である。九州は、鉄道や、進歩した農法や、ある種の工業に科学的応用法を採用することには、緩慢ではなかった。しかし日本国の諸地方の中で、西洋の風俗習慣をまねることを最も好まないのである。古の土魂<sup>いにしえ</sup>が、なお生きている。その魂が九州において、数百年間、日常生活において極端な簡易生活をなさしめたのである。衣服の奢侈その他種々のぜいたくに対する禁令は、厳しく行われて来た。そして、その禁令はその後<sup>すた</sup>廃れたとはいえ、その勢力は、今も人々の甚だ質素な着物や、簡單率直な風俗に、あらわれている。よその地方では、忘れられている品行上の因習までも守っていることや、外国人には明らかにわからないが、教育ある日本人には直ちに、それと知られる言語動作における一種の臆しない、腹藏のないところが特色であるといわれている。そして、ここではまた、清正<sup>きよまさ</sup>の大きな城の影の下（今は大勢の師団兵が入っている）にある熊本は、国民的情操である忠君愛国の念が、東京といえども及ばぬほど強いといわれている。熊本は、すべてこれらの点を誇りとし、またその伝統を自慢している。実際、熊本には、他に誇るべきものはない。だだっぴろい、まとまりのない、面白みのない、不体裁<sup>ふていさい</sup>な町である。古風なきれいな町は一つもない。大きな寺も、立派な庭園もない。（訳者注：水前寺公園など感嘆すべきものであろうが、その頃は、熊本市からは、少し離れた）明治十年の内乱に全焼したので、熊本は、今もなお、その土地の煙のほとんどおさまらないうちに、脆弱な仮小屋を急いで建てた荒野。という印象を与える。そこには、行ってみるような著名な所はない。（少なくとも、市内にはない）見物すべきものもない。娯楽もあまりない。この道理から、この学校は、場所がよいと思われている。ここに住む者には、誘惑物も邪魔になるものもない。しかし、また別の理由から、遙かはなれた東京の富有な人々は、熊本に子弟を送ろうとする。青年が、いわゆる「九州魂」になじみ、「九州かたぎ」を得るのは、望ましいことになっている。九州の学生は、この「九州風」のため、日本で一種特別な学生といわれる。

わたくしは、これを明らかにする程度に十分、この「かたぎ」について学び得なかったが、これは必ず、昔の九州武士の挙動に近いものであるに違いない。東京や京都から九州に送られる学生は、たしかに、全く違った境遇に順応せねばならない。熊本および鹿児島青年は、兵式体操その他制服を着用せねばならない時のほかは、昔の武士の着物に多少類似する着物を、今でも着ているのである。すなわち、短い着物と、膝<sup>ひざ</sup>の下に少ししか達しない袴<sup>はかま</sup>と草履<sup>ぞうり</sup>とである。着物の材料は、安い粗末なもので色は地味である。

挙動は乱暴ではないが、柔和ではない。そして、青年は、一種性格の峻厳な外貌を保つことができる。しかし、この自制の下に、烈しい自信力が潜んでいて、稀には、恐ろしい形になって現われることがある。かれらは、また、一種東洋風に粗野な人々といってもよい。可なり富有な家

に生まれながら、どの程度に肉体的困難に堪えられるかを、ためすこと以外に、他に興味をもたない人々を、わたくしは知っている。(中略)

長い間自分は、その(筆者注：熊本第五高等学校の学生を指す)微笑もしない平静の下に、如何なる感情、情操、理想が、潜んでいるかを知りたいと、いつも思っていたが無駄であった。実は、政府の役人である日本人の教師は、どの生徒とも親密であるとは思われなかった。わたくしが、出雲で見たような親しい関係は、痕跡もなかった。教育者と被教育者との関係は、教室に集まり又は別れる時のラッパの音と共に始まり、または終るように見えた。この点において、わたくしはその後、わたくしが幾分誤っていることを発見した。しかし実際の関係は、大抵は、自然的ではなくて形式的であった。そして、わたくしが「神々の国」を出て以来、わたくしが、たえず記憶しているあの古風な、深切な同情とは全く違うようである。

しかし、後になって時々、この表面の見せかけよりは、遙かに愛すべき精神の幾分——情緒的個性の暗示——を見るようになった。偶然の会話で得たものも、少しはあるが、最も著しいものは作文からである。作文の題は、思想感情の、全く思いもかけぬ花を咲かせたことが時々ある。誤れるはにかみ、いな、実際、如何なる種類のはにかみも全くないのは甚だ喜ぶべき事実であった。青年は、感情や、希望を、そのまま書くことを恥としない。かれらは、その家庭について、両親に対する敬愛について、幼年時代の幸福なる経験について、友情について、休暇中の冒険について書く。しかも、わざとらしくなく、全く真面目なので、わたくしが美しいと思ったように書いてあるのが、たびたびある。たいへん驚いたことがたびたびあるので、わたくしは、これまで受け取った著しい作文は、初めから、みな、ノートをとって置かなかったことを深く後悔するようになった云々と述べた後で、数篇学生の作文を例示している。

以上のように、学生の生態を、叙説し、分析し、観察し、次のような感想を付け加えている。“これらの青年が、全く自然の感情で、幼年時代の場面を思い出すことができる力は、わたくしには、根本的に東洋的だと思われる。西洋では、人生の秋が近づかない以前に、幼時を、はっきり思い出すことは、あまりない。しかし、日本では、幼年時代は確かに、何れの国におけるよりも幸福である。その理由で、成年になってから思い慕われることも早いのであろう”と。

1891年(明治24年)11月30日に西田千太郎にあてて、“生徒は、松江の生徒と、大へん異ってはいないようで、自分の知る限りでは、従順で、礼義正しく、紳士らしく、学間に熱心である”と告げている。

“東の国から”の中に“石仏”と題する一節がある。彼はいう。“官立学校(記者注：第五高等学校のこと)の後の丘陵の頂に、小さく仕切った畠が、段々をなして斜面に重なっているその上に、村の古い墓地がある。黒髪村(筆者注：現在は熊本市内に入っている)の住民は今、もっと奥の方に、死人を埋めるので、もはや、ここは用いられない。そして畠は、すでにこの旧墓地の限界を侵食しはじめつつあるようである。

授業時間の間に、一時間の暇があるので、自分は、この小山の頂を訪なうてみよう決心する

登る途中、無害な、小さい、黒い蛇が、道をよこぎってのたくり、朽葉色の無数の蝗が、自分の影にざわめき立つ。まだ、墓地の入口の、こわれた石段に達せぬうちに、小さい畦道は野草に蔽われて見えなくなる。墓地の中にも、全く道はない。雑草と石塔があるばかり。しかし、この頂からの見晴しはよい。広く青い肥後の平野が見え、その向うには真っ青な山嶺が半円形をなして地平線の光りに映えて見え、その更に向うには、阿蘇の火口丘が永遠の煙を吐いている。

自分の下には、近代都市の縮図のような学校が鳥瞰図のように見えている。みな1887年建造の窓がたくさんある建物で、それが長く連っている。これは19世紀の純実用的の建築を代表するもので、これをケントや、アウクランドや、ニュー・ハンプシャーに移しても、少しも時代の調子に合わぬように見えることはあるまい。しかし、その上に段階をなして連らなる鳥と、働いている農夫の姿とは、5世紀ごろのものとも見れば見られる。自分がよりかかっている墓の上に刻んである文字は、梵語の音訳である。そして自分のそばには、石の蓮華の上に、加藤清正時代に坐したままの態度で今も坐せる仏像がある。この仏の瞑想的な眼差は、半眼に開いた瞼の間から、学校とその騒がしい生活を見下ろし、そして怒るに怒られぬ傷害を受けたものが微笑するように微笑している。ただし、これは彫刻師が刻み出した表情ではない。苔と垢に歪められた結果である。自分はまた両手が欠けているのを認めた。気の毒になって、自分は仏の額の象徴的な小突起から苔を掻き退けようと努める。”（筆者注：この石仏は現在も、熊本大学法文学部の北側小峯墓地にあり、“文豪小泉八雲（ラフカデオ・ヘルン）の「東の国から」に記されてある阿弥陀さんである。ヘルン先生はこの石仏と立田祠堂の庭に気に入られ、たびたび訪れたそうである。”と書いた熊本市が設けた掲示板がある。ヘルンの石仏として知られている。現在この一帯は立田自然公園となっていて細川家の廟所がある）

ハーンは夫人とともに、小峯墓地を散歩した。“思い出の記”の中で彼女はいう『熊本で始めて夜、二人で散歩いたしました時のことを今に思い出します。ある晩ヘルンは散歩から帰りまして「大そう面白いところを見つけました。明晩散歩いたしましょう」とのことです。月のない夜でした。宅を二人で出まして、淋しい道を歩きました。山のふもとに来ますと、この上だということです。草がぼうぼうと生えていて小笹などが足に触れる小道を上りますと墓場でした。うす暗い星明りに沢山の墓石が、まばらに立っているのが見えます。淋しい所だと思いました。するとヘルンは「あなた、あの蛙のこえ聞いてください」というのです。また、やはり熊本にいる当時でした。夜散歩から帰った時のことです。「今夜、わたくし淋しい田舎道を歩いていました。暗いやみの中から、小さい優しい声で、あなたが呼びました。わたくし、ああといって進みまずとただ、やみです。誰もいませんでした」などと申したこともございます』と。

セツは、また別のところでは、清少納言のように、ハーンの好悪について“物尽し”を展開している。「好きなものは、西、夕焼、夏、海、遊泳、芭蕉、杉、淋しい墓地、虫、怪談、浦島、蓬萊、マルチニーク（筆者注：仏領西インド諸島の一つの島。ハーンに“仏領西インドの二年間”の著作がある）、松江、美保の関、日御崎、焼津、ビフテキ、プラムブーデン、煙草。

「嫌いなものは。うそつき、弱いものいじめ、フロックコート、ワイシャツ、ニュー・ヨーク、その他いろいろありました」と。「蛙だの、蝶だの、<sup>あり</sup>蟻、<sup>くも</sup>蜘蛛、<sup>せみ</sup>蟬、<sup>たけのこ</sup>筍、夕焼けなどはパパの一番のお友だちでした」とも。ハーンは蛙を愛した。一茶の句「手をついて歌申し上げる蛙かな」を、よく口ずさんでいたらしい。彼の著作「異国風物と回想」の中に「かえる」と題する一篇を物しているが、そこで、彼は述べている『延喜5年(西暦905年)に勅令によって、編まれた有名な「古今集」の序で、編者の一人である紀貫之が、面白い意見を述べているが、「花にうぐいす、水にすむかはずの声をきけば、いきとし生けるもの、いずれか歌をよまざりける」の中での「かはず」は、むろん、現在のカジカと同じ生きものでなければならない。普通の蛙が「うぐいす」の美声と並べられるわけがない。この蛙の一族の美声の歌手は昔は「かはず」と呼ばれていたのであるが、近世に至って「かえる」という一般総称と、ごっちゃになってしまったので、こんにちでは「かじか」と呼ばれている。また、前の句の妙味は、日本人が目上の人に<sup>あいまつ</sup>挨拶する時に、両手を畳の上について、指を外に向けて跪坐の姿勢をとる礼式を知っている人なら、よくわかってもらえるだろう」と。注を入れて「この姿勢は、礼式で定められているもので、複雑であり男女の性別、身分によっても異り、女子は指を外側に向けないで、内側に向けるとしている。この篇の最後を、彼は次のように結んでいる。

理解すれば常に愛すべき、あるがままの赤裸々な“自然”を容認しながら、日本人は、われわれが盲目的に、醜悪なもの、ぶざまなもの、厭うべきもの、と考えているもの、例へば、昆虫とか、石くれとか、蛙とか、そういうものに“美”を発見しているのである。日本人だけが、<sup>むか</sup>百足の形態を美術的に用いられるという事実は、まったく意味のないことであろうか。わたくしは諸君に、わたくしの所蔵している京都製のたばこ入れの、火焰のゆらめきに似た波模様のついた革に、金の百足が走っているのを、お目にかけてみたいものだ。と。

ハーンの手翰群（彼の書翰はいずれも大層長いので熊本に関する部分に限って抜粋する）

●西田千太郎宛のもの

1891年（明治21年）

（前文省略）今では、やや熊本にも馴れた気分になりましたが、日本でわたくしが行ったことがある場所の中では、最も殺風景な都市です。郊外の飽田郡にある加藤清正の有名な神社と仏閣は、訪れる価値があります。市には兵士が一ぱいいます。品物は高価で劣悪。よいのは絹布だけ全くここは絹どころで、ねだんも松江よりは安いのです。しかし、漆器、陶器、青銅器は、りっぱなものはなく、掛物も骨董品店もないのです。

同年11月30日

わたくしは、熊本が果して冬季温暖の土地であるか否かを疑いはじめています。当市は、わたくしが住んだことのある日本の都市のなかで、最も無趣味です。非常に長い町に、下品な小さな家ならんで、立派な神社仏閣はありません。あだかも古い都会の灰塵の上に急いで建てたかのように見えます。また事実そうです。松江の天神町に比較すべき町は一つもないのです。わたくし

は学校から2マイルほどの所に住んでいます。学校はやや市外にあるので、近くには、よい貸家がないのです。だから、わたくしの車夫をつれて来たことは、仕合わせでした。わたくしの家は大きさは北堀町（筆者注：前任地松江市でハーンが居住した所）の家ほどありますが、それほどはよくもなく庭園はおそろしく醜悪です。家賃は11円です。諸氏が東京ほどに高価で、嘉納氏（筆者注：当時の熊本第五高等中学校長、前出）は東京以上だといっています。

1892年（明治25年）7月27日

熊本は、わたくしが、初めに思った通りです。日本で最も醜く、最も不愉快な都会です。天気がおそろしく変化しやすく、また、たまらないほど、かびくさく、熱病の多い土地です。

1893年（明治26年）2月19日

貴君は、なぜわたくしが熊本を嫌うかと、不思議にお考えのようですが、まず第一には、近代化しているからです。それから、あまり大きすぎて、寺院も、神社も、珍しい習慣もないから嫌いです。第三には、醜いからです。第四には、わたくしは、依然として知り合いのない外来者にとどまっているからです。また恐らくは、文学的材料を得られないからでしょう。セツも、貴君と同様に、わたくしが当地の人たちを理解し得ないのが一番困ったものだと思っています。

1893年（明治26年）6月27日

あれほど、わたくしが、九州について不平を述べたあとで、びっくりなさるでしょうが、わたくしは、実際当地で、知り合いができるようになりました。しかし長い日時を要したのです。わたくしは、かなり長い間、多少疑惑の目で見られていたのだと信じています。この変化とともに、わたくしの見解もまた、幾分変わってきました。しかし、外人は長く日本に住めば住むほど、日本がわからなくなる。また、民族の差異は、教育のために驚くほど拡大してくることを、わたくしは知りました。換言すれば、高等教育は、わたくしたちを、一層接近させるのではなく、かえって、ますます分離させるのです。民族の性質におけるこれらの差異の原因を研究するのは、すこぶる興味があります。

1894年（明治27年）8月5日

わたくしどもすべて雇外国人は来年の議会で追い払われてしまうだろうと思います。もはや、日本で英人の英語教師には、前途がなくなりました。もし、わたくしが<sup>ひと</sup>一たび政府の雇をはなれたら復帰しようとは思いません。半分の給料でも横浜か神戸の会社で、ある地位を得た方がよいのです。

同年10月4日

これは、わたくしが熊本から貴君に差し上げる最後の手紙です。非常な病気だという公務上の口実の下に、わたくしは一両日中に去るのですから、わたくしの幸運を祈ってください。何故なら、行く先がどうなるか、わかりませんから。今後わたくしへの手紙は、神戸



熊本時代のハーンとセツ



市神戸クロニクル社気付にして下さい。

筆者注：明治27年6月に学制改革があり熊本第五高等学校と校名が変更された。ハーンの待遇（月俸200円）は悪くはなかったが、彼は再契約をすることなく、静かに、というよりもむしろ逃げるようにして、（上の10月4日付西田宛書翰参照）松江・熊本と続いた教壇上の生活から退場して在米当時の職業（新聞記者）に復帰することを決意したのである。仙台や鹿児島高等学校からの招きもあったがもはや、その決心がゆるぐことはなかった。神戸クロニクルの招きで、毎日一欄づつ記事を書くという条件で月俸は100円であった。

1892年（明治25年）11月11日 ダブリュー・ビー・メーソンにもハーンは苦衷を訴えた。

（前文省略）熊本では、人の世を研究する機会にあまり多く接することはできない。わたくしは九州人——普通人は好かない。出雲では、誰もが柔和で優しくて古風だ。ここと来たら、百姓連や低級な連中が、酒は飲む。喧嘩はする。女房を殴るで。前に、わたしは、日本人は悉く天使であって……、と書いたことを考えると心をかきむしられるようだ。と。

●チェンバレン教授宛のもの

1891年（明治24年）11月

この土地（熊本）が他の地方と全く異っていることを知ろうとするためには、他へ旅行してみなくてははいけません。松江は熊本と比較してみると、到底比べものにならないほど、小ぎれいで家屋も美しく、その他いろいろの点で興味の多いところす。わたくしは、熊本という所は、宗教上から観察して、どんな所であるか、まだわかりません。熊本には、家庭用の、ひの木作りの神棚を店一面に売りさばっている商店が一つもありません。また入口に注連縄を張ったり、田野に護符を出したり、人家の入口にお札を貼ったり、神道のしるしを沢山に見せびらかしたり、神棚や仏壇を家ごとに飾り立てたりしている者は、熊本にはほとんどありません。神社仏閣は、ここでは不思議なほどに少数であります。宗教上から考えてみると、熊本は全然無趣味な土地であるように見えます。あらゆる物は、すごいほどに高価です。ここでは、出雲人のゆかしい単純性は全然見ることはできません。わたくしの家族は、わたくしと一緒に4人だけ熊本に移りましたが、あたかも水を離れた魚のような感じを抱いております。

1892年（明治25年）12月12日

「夏は暑熱はげしくて何事もできない。冬の寒気は忍ぶことは全くできない」今直したばかりの作文のこの一節は、ここの気候に関するこの土地の人たちの意見を正しく言いあらわしています（中略）火なしに二冬の間、やりました。火鉢は火ではありませんね。あれは、ただ幽霊です。タバコの火です。こたつは、背骨の長期の訓練を要しますが、わたくしには、それが欠けています。そこで、わたくしは、何でも日本の事物は大好きで熱中するのですが、この冬は、書齋に、ガラス障子を入れて、ストーブを備えつけるために大勢の大工を雇わなければなりませんでした。

寒気をおそれたことが、ハーンがなつかしい松江の土地と人々と永遠の別を告げなければならなかった最大最重要な理由であったらしいことを考慮すれば、ハーンの失望の程は想像に困難で

はない「熊本は暖かいし、松江とはまた別の意味で面白い場所であると、熊本への赴任を勧めた人チェンバレン教授も、ハーンのこの手紙を見て、同じく、がっかりしたことであろうと思われる

1892年（明治25年）12月12日

わたくしの新居およびそれに関することについて書くために手にペンをとります。家はきれいでよい庭があります。松江の家の庭ほどにはきれいではないが、築山や何段かに造った松や、驚くべき無数の石があるので、なかなか立派です。軒でガラスの風鈴が鳴っています。それから便所に猿の絵があります。便所に本当の猿がいたらどうしょう。このことだけが、不適當な、そして不快な装飾と、わたくしには思われます。ストーブは、よく役に立ちます。それで、わたくしは、ガラス箱のような書齋で君を安楽にすることができましょう。しかし、西堀端へ移ると、方向が、北になります。そうすると、北の方向と、その方向へ移る人を悉く憎む荒神の気に入らないことになる。（ああ、荒神様、もし、わたくしが、どんなに南方へ行きたがっているか判ったら、お互に大変なかよしになれたでしょう。）

1893年（明治26年）1月19日

もし、わたくしの周囲に、わたくしが作った小世界がなかったら、すべての欧州人から離れて暮らすことは、なかなかつらいでしょう。ある者は、まだ松江にいますが、ここでも、その人たちにとっては、わたくしが生命であり、食物であり、色々の物であるという人たちが、ほとんど12人います。外では、どんなに堪え難くとも、うちでは、わたくしは、古い習慣と思想と礼義の小さい微笑の世界に入ります。そこでは、一切の物は眠りの中で見た物のように、柔和で静かです。時々それがただ夢のやうに思われるほど柔和で、触れても分からないように、穏やかで、やさしく、自然です。それでそれが消えて行かないかという恐怖が起こります。それが、わたくしとなっています。わたくしが喜んでいると、それが笑います。わたくしが愉快でないと、一切のものが沈黙します。その力が軽くて蒸気のようなのですが、必死の強さを持っていて、たえず、わたくしの良心に訴えます。わたくしは、それを離れたらどうなるか想像できません。どこか、外で朽ちるよりは、ここ、どこか古い仏教の墓地へ入る方がよい。すなわち、せめて人は「親子は一世、夫婦は二世、主従は三世」という古い佛教の諺の実現を漠然と認めることができるからです。もちろん、この諺は、ご存知でせう。

1893年（明治26年）4月17日

わたくしは、日本について書物を書くということが、ばかであったと、そろそろ考えてきました。わたくしの最上の慰藉は、毎年、ほかの人々が、ただ一旅行を頼りとして書物を書くことです。ところが、その口実は、はなはだまずいものです。わたくしの友人で、決して体裁のよいことをいって満足しない人が、わたくしに、こんなことをいいます。

「きみは、出雲で非常に歓迎されたと思うかね」「そりゃそうさ」「ところが、熊本では、あまり歓迎されていない。よろしい。それは当然だ。しかし、きみは、なぜ、出雲で歓迎されたか判っ

ていますか」「さあ、まずきみの意見を聞こう」「ただ、きみは珍らしかったからさ。それから新しい不思議なものだったからさ。誰でも、きみに、会いたかった。きみは珍物であった。そこで、きみを、どこへでも招待して、きみを喜ばせようとして、なんでもきみに見せたのだ。それが、彼らの好奇心を満足させる方法であった。彼らはよい印象を与えるように、できるだけ丁寧にしたのだ。それから、彼らは、はなはだ質朴な人間どもだから、実際よりも賢いえらい人だと買いかぶったのだね。それできみに色々な意見を聞いて、その意見を新聞に発表したのだね。そうだろう」「そうだ」「なるほど、それは全く、きみはただ不思議な珍しい人物に思われたからだ。しかし、熊本では、きみは不思議な人物でも、珍しい人物でもない。公衆は、色々の種類の外国人に慣れているし、また、熊本人は交通の路に居るわけだ。先生はといえば皆東京人だから、外国人には全く慣れている。きみはその人たちに、興味のあるような、何か新しい役を勤めそうにも見えない。その人たちは、きみに少しも興味を払わない。その人たちは、出雲の人たちのような質朴な、ばかな人間ぢゃない。それから、その人たちは非常に骨を折って丁寧なこともしない。そんなに丁寧でないのが、古い九州の伝統だ。そんなのは、弱い、しっかりしない、男らしくないと考えられる。きみはこの人たちは、きみに、べこべこお辞儀ばかりしていないことがわかるだろう」「そりゃ、そうだ」「その人たちは、お互の間でもそれはしない。お互に離れて立っているのだね。外国人をなにもえらいとは考えていない。それから、きみは、日本の他のどこでも開けた所じゃ同じだということが分かるだろう。鉄道から離れた出雲のような所ではきみは外国人だから無学な人たちには興味があるのだね」「うん」「そうだ、しかし日本の他の地方では全く同じ理由で興味がないのさ。教育のある日本人には、きみが興味がある筈<sup>はず</sup>はない。

きみはその人たちと話ができない。その人たちの習慣はきみに分らない。その人たちの生活ときみの生活とは違う。きみは見せ物ぢゃない。珍しいものでもない。君はただ“先生”に過ぎないので、知らない人たちに推薦するような著しい物を君は何も持っていない。しかし、きみは、やはりよく待遇されている。開けた日本のどこでよりも恐らく遙かによく待遇されているのだ

「しかし、何故きみは、このことを、みな以前に言ってくれなかったのかね」「それは、ただ、きみを不愉快にしたくなかったからさ。きみは喜こんでいたろう。しかし、もし前にこんなことを言ったら、きみは愉快ではなかったろう。今では一種の慰<sup>なぐさ</sup>めとして君にいうのだ。出雲では、そのことを知らずにいた方が、君のためによかった。熊本では、知っている方が君のためによからう」「そうだ。しかし、わたくしの書物は間違いだ」「何故みな間違いと言うのだ。それには本当の結果が現われているぢゃないか。きみを喜ばそうと人々が努力した結果が。そしてその人人が本当にその点は真面目であった。その人々が君を考えたとき君が想像した通り、君を考えたからでわないか。きみがきみ自身の感情を述べている以上、その意味でその書物は本当であるわけだ。しかし、もしきみが、日本人の性格について書く場合、もちろん君は間違いをやる。きみにそれは分らない。実際きみに分かるとは信じられない。君には分らないのが当然と思われる。もし分かたら奇蹟としか思われぬ」

これが遠慮のない正直な話し全体の正味だが、全く甚だ慰めになります。錯覚と神秘の海を、航海したあとで、たとえ前途は、ありがたくないにしても固い土地の上に立つことは、いつでも慰めになります。

1893年（明治26年）6月27日

試験が来ています。暑熱だけが愉快です。殆んど西印度のようになりました。前途は甚だつまらなくて面白くない。材料はない。熊本では何も得られません。出雲の材料は使いつくしてしまいました。読書をしたがそれも退屈です。何か悪いことのような気がします。私はキップリングの句を思い出します。

One minute's work to thee denied, お前に、一分間の仕事もするなど、いうのは、  
Stands all Eternity's offence. 全く、永遠の罪をつくるということになる。

わたくしは、ここでは、興味をもっているのだが、材料を得られません。興味と文学上の義務とは反対になっています。どうしたらいいだろうというのが、わたくしの永久の不平です。酸のように、わたくしの頭脳に食いこんでいる思想があります。それは、わたくしも、いよいよ立往生かということです。わたくしに、誰か仏教——生きた仏教を教えてくれる人があったら、喜んで給料を払います。そしたら何か書けるでしょう。しかし、何等の印象も何等の楽しみもないのは、たしかに地獄——等活地獄です。ここには、宗教も、詩も、礼義も、伝説も、迷信も、ありません。下等の現代化ばかり。きみと話した例の考え——全くの社会制度の破壊は、革命を生ずることになるということ——もわたくしの心を離れません。反抗心、外人排斥、伝説の侮慢、宗教の軽蔑。それから、国民的うぬぼれ。これらが丁度、現代化が完全になる割り合いに応じて進んで行きます。この国は、たしかに、その美点を悉く——日本的なところを全く失いかけて来ました。産業的に野卑に、そして又平凡になろうとしています。そして、わたくしも倦きてきました。要するに、この頃は、わたくしの機嫌は甚だ悪い。

1893年（明治26年）7月16日

何という道徳的崩壊が、この国を、襲っているのでしょうか。漁夫が喧嘩をする。農夫が争い、政治家が互に殺し合い、学生が戦う。犯罪が一般に増加するなど、もう一代もしたら、日本はもう、世界で最もよいところではなくなるでしょう。

1894年（明治27年）9月11日

わたくしども一同は、熊本が、いやになりました。今年か来年、ここを出るよう努めなければなりません。しかし一時アメリカへ行った方がよいと、わたくしは殆んど確信しています。誰も、身を、アリヤン人種から孤独ならしめて罰金を払わずには居られません。あなたは、それを長い間お忍びにならなければ、その意味がおわかりになれますまい。その境遇は、言語に絶したものであります。わたくしが、よく仕事をすると仰せになります。仕事をしなければわたくしは、気違いになりましょう。あるいわ、神経病の餌食になるでしょう。恐らくはその苦しみは、こういう点でよかったですでしょう。すなわち、それがわたくしをして、他の事では得ることができなかつ

た文学的訓練を持たざるを得ざらしめたのであります。5年間に3冊（というのは、わたくしの新しい書物は殆んどできていますので）書くということは——その上に授業もするのですから実際には余程の仕事をしたことになります。

筆者注：この時代は、ハーンは授業として、英語とラテン語（ある一時期には、フランス語も含め）1週間に27時間を持っていた。執筆の方も大多忙であった。“Glimpses of Unfamiliar Japan”「日本瞥見記」の後半の大部分は熊本で書いたものであるし、そのほかに次の著作“Out of the East”「東の国から」の材料集めや実地踏査、資料の収集調査等々に、正に八面六臂の大活躍をしていた。彼が尊敬する校長嘉納治五郎は、ハーンに自由な授業を許していたけれども、それでも授業時間の過重には大いに苦しんだようである。後年、東京文科大学の英文学教授ウッドの任期満了後の候補者として、外山正一学長が、チェンバレン名誉教授を介して、ハーンに就任の交渉をした際ハーンは「よい校長の下で気楽な学校に行くことであれば月100円でもよいが、外国語を三つ、教科書なしの一週27時間、五分間も腰かける暇もない、陸に昼食する時間さえない熊本のことを思い出すと一週1000円でも行く気になれないが」とチェンバレンから学長へ伝えてもらった。そこで、学長から、そのような学校ではないとて詳細な説明をすることになった。

嘉納校長については、前出1891年11月30日の西田宛書翰の中で「貴君は、きっと嘉納氏を大いに好きになるでしょう。氏はわたくしが逢った大抵の日本人教師と頗る異っています。非常に同情深く、非常に飾らない性質です。それは毅然たる人物に特有のことです。一度氏に逢うと、まるで多年の知り合いであるかの感があります。氏は兵式訓練時間のほかでは、服装や作法のことは、やかましく言いません」と述べている。

熊本人とは？——県民意識調査を通じて。（ハーンの熊本人観への“合鏡”として。）

日本放送出版協会「日本人の県民性」（NHK全国県民意識調査）に転載してある熊本日日新聞社説にいう「……（県民意識調査の）全体としての特徴は、同じ服装をし、同じインスタント食品を食べ、全くどこもかしこも同じように見えながら、一皮めくると、生活意識、社会的態度、宗教感情など、地域差が大きく浮かび上がっていることである。外形を画一化して行く近代文明に対して、地域の文化——風土の性は、これに抵抗しているようである。……熊本県民像は、保守性・土着性が強い半面で、進歩性とはやや異なる突進性が見られる。このアンバランスな精神風土から、エネルギーが噴出してくる。この多様性・雑多性の中から可能性を引き出すためには、地域に密着して下から組織して行くという地域民主主義の根づかせ方が課題だろう」（53・9・8）

同書264ページ ▶伝統・保守王国——熊本

熊本県人の意識の特徴は、九州人に多くみられる特徴が、さらに際だって強いところにある。なかでも、伝統的な価値観を重視し、保守的心情が強いことは、昔からのしきたりは尊重すべきだ。天皇は尊敬すべき存在だ。と考える人が、全国一多いことによく表われている。また、「父母を手本に生きてゆきたい」「年上の人には自分をおさえても従う」という人も多く、伝統的価値観・社会秩序を重視する生き方である。

熊本県は、もともと肥沃で生産力の高い風土に恵まれ、新しいものを取り入れる必要があまりなかったため、保守的な県民性が形づくられ、何かにつけて長老の権限が強く、新しい考え方が通りにくい風土であるといわれている。父母を手本にし、年上の人には従うという意識の強さは、このことをよく表わしている。また「祖先には強い心のつながりを感じる」という人も非常に多く、良くも悪くも、伝統的日本人の典型である。政治的な保守主義の強さは、選挙にもよく表われている。衆参両院選挙をとおして、熊本県での保守党の得票率は常に六割を越え、保守王国といわれる。また、昭和五十一年の衆議員選挙時に、NHKが行った世論調査では、自民党の支持率は六十パーセントを超え全国一位であった。この伝統・保守志向の意識は、農村の性格が残っている所で一層強く、玉名、山鹿、菊池など県北部は、福島県の会津地方などと並んで、全国でもっとも伝統的・保守的な所であろう。

また、熊本県人には「生活を切りつめても、金や財産を残したい」「世の中が変わっても農業は国の基本だ」と考える人が、いずれも、全国でもっとも多い。このような金銭観も、古くから日本人の美徳とされている。ものを大切に、質素に暮らすという生活態度と係るものであろう。また 農業は国の基本という考え方も、日本古来の思想である。

土佐に「いごっそう」、薩摩に「ぼっけもん」、肥後に「もっこす」。似ているようだが、「もっこす」は、ちょっと違うようである。——反骨、がんこ、へそ曲り、そうしたものを、さらに挺子でも動かぬ一国さで貫き、肥後独特の「野暮ったさ」で包んでいる味。そういうものが、「もっこす」の姿かたちか。

肥後気質に「わまかし」というのがある。ただのからかい、や、冗談とは違う。真正面から、つかかってくる相手を、くすぐって笑わせながら、ピリッと山椒の辛味をきかして批判する体のもの。もっこすも人間。時に寂しい。そんな時、盛んに「わまかし」で、みずから慰める。さしずめ、もっこすの「音」とでもいおうか。……わまかしは民謡に出ては、「おてもやん」さらには「肥後仁輪加」。さしずめ肥後狂句は、わまかしの文学ということになる。『お国はどちら』『熊本』『おっ、肥後もっこす』。熊本人は、もっこすでなければならぬようなごあいさつである。

(朝日新聞社 新人国記)

たしかに、いわれているような気質(もっこす気質)を感じさせるところも少くない。世の中の風潮に対して、批判が強いこともその一つだろう。「今の世の中は、義理人情がすたれて暮らしにくい」と考える人が非常に多い。九州の各県では、このような批判は全体に少なく、特に、熊本と同じように、伝統的、保守的意識が強く、人間関係も親密な佐賀・鹿児島では少ない。熊本県人の意識には、社会の変化に敏感ではあるが、それにたやすく順応しないところがあるのだろう。また、「人間には、すぐれた人と、そうでない人がいるものだ」という、人間の資質の差を認める人が非常に少ないが、これも、熊本県人の反骨精神のあらわれかも知れない。しかし、「人間には分に応じた生活があるのだから、あまり不満を持つべきでない」と考える人は多く、実際生

活の態度としては、現実を受け入れようとする。（“日本人の県民性”）

ところで熊本県人自身は、その県人氣質をどのようにみているのだろうか。まず、「がんこ」と思う人は64%で、「ものわかりがよい」という人の24%を大きく上まわっている。また、古いものを好むか、新しいものを好むか。では、「古いものを好む」という人がかなり多く、県人の氣質を、保守的と見ている。このほか、「地味で、ねばり強いが、向うみずなところがある」と思っている人も多い。（熊本独自質問）（“日本人の県民性”）

### ハーンの憂愁と喜悅

ハーンの在熊時代の書翰の中で熊本の場所や人に関する部分を以上に抜粋して紹介したのであるが、その気候、風俗、人情、風景、宗教的雰囲気、物価等ほとんどあらゆる面で、彼の嗜好？との間に大きな齟齬があった。ハーンはその大きな不満を、彼の熊本への転任の斡旋の労をとり、それに伴う好条件を列挙して熱心に勧誘したチェンバレン教授に対して、繰り返して訴えている。ハーンの最初の期待が大きかっただけに、その現実との開きが、彼の失望感を深刻化し、苦悩や焦慮の中に苦しむことになったのである。

さらにそれに追討をかけたのは、当時の時勢である。明治27年7月には、日清戦争が開始され熊本は歩兵第一補充師団の根拠地であった。熊本市のシンボルともいふべき、日本三名城の一「銀杏城」は去る明治10年の西南の役において、50余日に及ぶ薩軍の猛攻もものかわ、その難攻不落ぶりは、天下の耳目を聳動した。すでに見て来たような熊本人氣質のためもあるが、熊本人の意気正に天を衝くの概があった。当時の新聞は宣教師が教会建設のための土地を購入しようとするその非難攻撃を行ない、土地を売ろうとする日本人を目して売国奴と罵り、宣教師はこれをスパイと呼んだ。外国人が日本人妻と外出するのを見て、「風俗を紊乱する毛唐をば速刻追い出すべし」と新聞に論じる時代であった。このような時代風潮は、熊本高等中学校のお雇外人教師であるハーンにとって、全く人事ではないのである。彼は当地では、かなり社交的であり、彼自身では、「学生から他に何も得られないでもその信任だけは得ている」と称していた。事実その通りではあるが、彼の妻セツは、まだ正式の結婚をした間柄ではなく、当人同士の真意とはうらはらに、世間の目から見れば、いわゆる“洋妾”であり、勢の及ぶところ、何時いかなる危害が彼等に加えられるかわからないということを考慮してであろうか、明治27年10月日清戦争のさなかに、前述の通り、神戸クロニクル社の記者へと急遽変身している。

1893年（明治26年）6月にはチェンバレンに打ちあけて言う。

「反動」と言へば、それがわたくしの学生の作文にも、たくさん反映しているのを発見します（勿論これは内証です）わたくしは学生から他に何も得られないでも、彼等の信任だけは得ているので、考え通り書いてきます。彼等は明らかに外国人嫌いを発表します。日本から一掃されること、この国から追放されることを望んでいます。出雲では（そこでは、わたくしは外国人を追い出す古いまじないをいくつか見ました）その感情は恐らくそれ程強くはなかった。今日では甚だ強いようです。多くの作文には戦争を望んでいることが現れています。この国が外国人のどれいとなっ

ていることを嘆じているのが外にたくさんあります。多くは、ハワイの例を考えています。それを日本人はすばやく注意した。「野獸的外人に服従した」印度の例を引いたものもあります。これがみな青年の作文です。そうです。しかし大概二十才ばかりのこんな青年も、世論から彼等の説を作ってくるのです。個人的自発的の説は彼等の間に稀有のことです。わたくしは決して彼等に独創の意見を発表させることも、会話の題を考え出させることもできません。わたくしは彼等に考える世話をせねばなりません。たしかに彼等の考えは彼等のために作られたものであるからそれで意味があります。

日本は、日本が受けてきた尊大な取扱いに対して、今やしかえしをしようとしています。わたくしたちは内々軽侮されているか、あるいは憎まれているか、あるいは両方であるとわたくしは思う。たしかに“雇人”であるから、軽侮され、“優勝者”であるから憎まれています。これはもちろん新日本のためにです。「小さいことに情け深い」という礼義正しさは、まだ一般民衆に残っています。ここでは教育のある人々の間には、それを少しも見ません。わたくしは、どうかといえば、信用されて容赦されています。ただそれだけです。わたくしは、何か言えば、お辞儀をされます。何か問えば、丁寧にへこまされるか、避けられます。実際余り知らせてくれないで、質問などするものでないことを理解するように仕向けられます。もちろん学生に対しては、わたくしは、兄のようでも困ることはありません。それから、わたくしは、外国人に関する彼等の感情を押えようとはしません。むしろ奨励します。わたくしがいつも押えるのは“日本は小国に過ぎない”とか“無学な人民は偶像を礼拝する”などというような言です。わたくしは彼等自身の信仰に対する尊敬、彼等自身の国家に対する尊敬を教えます。わたくしは事実英国の謀反人であり、背教者です。しかし、物の永久の順序において、自分は正しいと承知しています。と述べている。(以下省略)

熊本時代のハーンにとって、最大の事件は明治26年11月17日(金曜日)に起った。すなわち長男の誕生である。ハーンはこの子に、自分の名前ラフカヂオにちん囚んで“一雄”と命名した。彼は1893年11月に西田にあてて、「親愛なる西田。君のご質問に対する説明のため、引用句を探そうと思って、昨夜この手紙をそのままにしておいたのです。すると、夜に、子供が生まれました。余程丈夫な男の子です。黒い目と髪で、わたくしの容貌を少しばかりと、セツの容貌を少しばかりと、もっています。セツは十分健康で、貴君へ、よろしくと申し上げました。と伝えている

アメリカの親友ヘンドリックには、次のように書いた。

君ひとに一つお知らせしようと、数週間待っていたことが、思いのほかおくれて、やうやく昨日になって出来しゅつたいしました。長男の誕生です。

非常に強壯で大きい黒い目をしてしています。しかし西洋の子よりは、むしろ日本の子のようです。鼻は、わたくしに似ているが、母の容貌が種々の点で、わたくしの容貌に混ざっているから不思議です。幸に何も異常がありません。医師の説によれば骨の様子で、丈たけが高くなることがわかるそうです。欧州人と日本人の雑種は、両親とも壯健であれば、いつも改良です。幸い妻の一族はみな強壯な士族です。妻も無事ですが、わたくしは心配しました。



それから、この新しい経験で、出産ということは、神聖な、また恐いもので、宗教の力をかりて保護しても、まだ、十分とはいえないことを非常に深くさとりました。それで自分の子供を生んでくれる女を虐待する男も世の中にはあると思い出したら、天地もしばらく暗くなるような気がしました。わたくしにこんな幸福を授けてくれた不可思議な力に対して、<sup>うやうや</sup>恭しく感謝したことを白状します。それからお礼の祈りを捧げました。そうするのが愚行だとは思いませんでした。

君がいつか、父となられることがあれば、一生のうちで最も不思議な強い感じは、始めて自分の子供の細い叫び声を聞く時であろうと思われます。丁度自分の体が二つあるような変な感じがします。そればかりではない。説明できない一種の感じがあります。恐らく、昔昔、天地が開けて以来わたくしどもの種族の父と母とが感じ来った感じが、この時自分に反響して来るのだと思える程の不思議な、また微妙な感じであります。云々と。

長男の出生は、ハーンの人生観を一変させたもので、この後に友人に与えた手紙に、一雄の消息を述べないものは殆んど見られないようになった。彼は父親としての新しい責任を感じ、自分が受けたような教育は受けさせないつもりだという決意の程がヘンドリック宛の手紙に述べられている。彼は責任の痛感と同時に従来にも増して一層の刻苦精励をすることになった。

1895年（明治28年）1月、ヘンドリックに書き送った。

……今では時間程貴重なものは何もありません。わたくしは無駄話を聞きに行ったり、結婚する見込みもない（既に妻帯しているから）美人を見に行ったり、時間つぶしにカルタをやったり、あるいわ美しい事も、真実な事も語っていない手紙に返事を書いたりして、時間を浪費することはできません。もちろん、わたくしも、まれに、こんなことをすることもありますが、しかし、あとで、一生のうち、それだけ痛ましく浪費されたと深く感じます。その償い<sup>つぐな</sup>に死ぬまで雷のように勉強します。りっぱな事もできませんが、しかし少しづつ分ってきたようです。

わたくしは、どんな個人的娯楽にも無頓着になったようです。同情と、同情のある話の他には。これは少し病的かも知れません。もっと著しいのは、わたくしが、その人々のために働くのが当然となっている人々の為に働くのは、最大幸福だと感じてきたことです。わざと考えているのではなく、その考えは、わたくしの一部となっている程に感じるのです。

それから、わたくしも、もちろん、少し成功して少しほめられたい。余り成功して余りほめられると驚いてしまいます。しかし、これまで得た賞讃でも時々面喰らったことがあります。用心しなければなりません。

次に、これまで好きであった事で、何だか嫌いになったことがあります。「プティ、ジュルナル・ド・リール」や「シャリバアリ」などは一冊見ても、いやになって怒りたくなります。本能以上の高尚な感情と衝突する本能に訴えようとの見えすくような考えで書いたフランス小説は面白くなくなりました。パリス・オペラが隣りにあって、無料で入場ができても行きたくありません。もし行けば、ほかの人が喜ぶのを見るためです。絶世の美人を訪問して夜会服で迎えられるのもいやです。ずいぶん変人になったとお考えでしょう。何という主義から来たのでもありません。

ただ、小さいながら自分の最善なるものに忠なるわけに行かないものは、何でも避けたいと思うだけです。この規則から少しでも背くと仕事の方に関係します。

全体において少しづつ進歩するように思います。もちろん、わたくしの著述について落胆したり、つまらないと思ったりします。今日は可なりよいと思ひ、明日は自分は馬鹿でだめだと思ひます。つまり神経のせいによるのです。しかし、ながく満足しているのは非常に有害だと信じます。失敗や困難や嘲笑は欠くべからざる薬です。と。

過労のために1894年から95年の初めにかけて三ヶ月ばかり眼病のため読書執筆を休んだこともあった。この時に診察治療の任にあつた医師ドクトル・パブリエルは、もと、ドイツの海軍軍医であった。軍艦勤務の時分からハーンの愛読者であつて、ニュルンベルグの新聞に、ハーンの著「チタ」を翻訳したことがあつた。

### ハーンの社交的一面

九州日日新聞 明治25年1月9日(土)(原文のまま)

#### ●衆目悉く萃る。

昨日観兵式の後、偕行社において、野崎師団長の宴会ありしが、賓客は武官が多く、各々肩綵を垂れたる大礼服に、名誉の勲章を辺りまばゆきまで胸間に掛け列ね、威風凛々あたりを払うて見えたるにぞ。衆客孰れも目を張りて之を凝視すると思ひの外、其の視線は皆な来客の一外人に注ぐぞ不思議なる。そも此の外人は其の名をヘルン氏と呼び、市内手取本町に宿し、当時第五高等中学校の教師なるが、氏は非常の日本臍負にて、常に日本服を身にまとひ、室内の器具より日用品に至るまで、凡て日本品たらざるなく、現に本社新聞の愛読者たり。又大の敬神家にて、室内には天照大神を始め、八百万の神々を勧請して、毎朝之を拝し居れりと。当日階行社宴会の時にも松扇の三つ紋ある黒羽二重の羽織に、仙台平の袴を着し、扇子をチャンと腰に差したる有様と、目の色の青きに赤葩花々たる顔と、特に目立ちて見へたりければ、扱こそ衆目を一身に引き受け、花嫁も及ばぬ程見つめられし次第にて、当日第一の愛嬌なりしと。

彼は西田に、「礼服着用の規定があつた。自分は和服の礼服しか持たなかつた。将軍がわたくしにその着用を認めたので、そのようにした。和服の客は自分一人ではなかつた」旨書き送つた。

明治26年3月4日(土)

#### ●貧児寮寄附。

第五高等中学校校長中川元氏(筆者注:嘉納校長の次の校長)を始め職員有志の人々は、金拾四円を貧児寮に寄付し、又同校雇教師ラフカヂオ・ヘルン氏も同じく同寮の美拳を賛し、金五円を贈りたり。東肥校生徒諸君は、金六円四十六錢八厘を寄附せり。

明治27年9月2日(日)

#### ●外人賞賜

第五高等中学校雇英国人ラフカヂオ・ヘルン氏は、昨年十月島根県松江市水災の際、窮民救助として金五十円を寄附せしに付、昨日其賞として五等木杯一個下賜せらる。

また一方、明治26年10月29日（日）の山陰新聞に下の広告が掲載されている。

県下風水災義損広告

- |           |                 |           |
|-----------|-----------------|-----------|
| 一、金、壹円五拾銭 | 松江市灘町           | 中村猪之助     |
| 一、金、三拾銭   | 同               | 金木竜三郎     |
| 一、金、三拾銭   | 同               | 小林丈兵衛     |
| （中 略）     |                 |           |
| 一、金、五十円   | 熊本県熊本市西外坪井町堀端三五 | ラフカヂオ・ヘルン |
| （以 下 略）   |                 |           |

山陰新聞には、また、ハーンが島根県知事大浦兼武に、木杯下賜の件につき感謝状を送ったと報ぜられている。

1894年（明治27年）3月7日 チェンバレン教授へ。

両陛下は、わたくしども全体——教員と職員——へ、それで愉快地楽しむよう、50円賜りました。学校では新しい日本の歌がうたわれました。そして一同両陛下のご肖像にお辞儀をし、それから軍隊式敬礼があり、それから食堂で両陛下のご健康を祝して飲みました。（筆者注：この日は、明治天皇の銀婚式の祝賀会が学校で開催された）それから「テンノウヘイカ、バンザーイ」。それが何という叫び（YELL）でありましたろう。西洋の大学の本当のエル（YELL）のようでありました「テンノウヘイカ、バンザーイ」二度目は叫び（YELL）ではなく、明らかに怒鳴り（どなり）で、聞いていて、わたくしを元気にならせるものでした。三度目の歓呼はどんなであろうと、わたくしは怪しみました。それが突然猛烈な歌になりました。教員の一人が「みんな非常に興奮しています。あの歌は良い歌ではありません。俗です。」といました。と。（中略）

三月十日（土）には同教授にあてて書いた。今朝わたくしは、学校から、奇妙なお祝いの催しの一晚を過ごして二時三十分に帰宅しました。金曜日の午後6時頃提灯行列が学校を出ました。生徒は約400。それがめいめい赤い小さな提灯を持っていました。……9時に学校へ帰って来て、それからお祝いの催しが始まりました。その催しは、間に吟誦が入っていたしたが、主として演劇的なものでありました（中略）

紙上でもっとお話しますと、ご退屈になるでしょう。その夜は、わたくしには非常に愉快であったと申し上げれば、たくさんであります。その対話はわたくしには分かりませんでした、所作は分かりました。わたくしには——ラテン学生の演技のように——実際すこぶる旨い（うまい）と思われました。わたくしは、イギリスの生徒は決して上手な役者ではないと思います。フランスの生徒とイギリスの生徒の所作の非常な相違は、若い時分に強くわたくしに印象されていました。

それからその演技の大部分の特徴をなしていた極めて強烈な国民的感情を——古昔のサムライ時代、帯刀の時代を、いつも、なつかしみ慕っている青年の真の熱誠を認めることができます。役人はどんなであろうとも、学生は日本の力たるべき感情を確にもっています。二時ちょっと過ぎに余りに多くの生徒が酒を飲めとすすめますので、わたくしは逃げました。十五はいばかり飲

まざるを得ませんでした。ですからこの手紙を書いている今、頭痛がしています。

以上のように、彼は、熊本時代には、羽織袴で観兵式の祝宴に出席して来会者一同を驚かしてみたり、祝賀会に出席して餘興を見物したり、寄附金を出すとか、学校の卒業生全体の写真に加わったことも二回ある。彼は可なり社交的であった。

前出の人国記によると、五高生に酒はつきものであった。寮内の酒は、ストームとなり、<sup>まかない</sup>賄 征伐となり、“竜南の七不思議”の一つ“晴夜の寮雨”となり、町に流れては、目抜き通り“通町”の乱舞となった。とある。

ハーンが祝賀会に出席したこの年に学制改革があり熊本五高が誕生するのであるが、人国記にあるような酒の上の武勇談が、この時分にすでに有ったものかどうか、筆者には詳ら<sup>つまび</sup>かではないが、彼は祝賀会に出席して、餘興を見物し、生徒たちと飲を共にしながらも九州人（熊本人）を理解をしようと熱心に努めていたようである。この年に日清戦争が始まるのであり、ハーンは前述のように学校から淋しい退場をするのであるが。

#### 秋月胤永先生について

ハーンと同僚で、漢文の教師である。西田への手紙の中で彼は述べる。

“巨髯を蓄えたりソクラテスの如き頭を有する愉快な漢学の老教師のほかは、すべての教師が英語を話します。丁度片山氏（筆者注：松江尋常中学校教諭片山尚綱）を一見して好きになったように、わたくしは、すぐにこの漢学者が好きになったのです。漢学には人を温雅ならしめる力が存するのかわらぬと思う。多分この学問の講究に際しての始終必要な忍耐と、これに伴う美的情操が、かように人品を変えるものでしょう”と。

ハーンは秋月先生に古稀の祝文を贈呈している。（長文を厭わず採録する）

#### 秋月老先生

世界における最も丁寧なる人々の礼義を知らないわたくし、それから上品にして美しい種類の挨拶の言葉のあるその国語を知らない一外国人であるわたくしは、わたくしの<sup>うやうや</sup>恭しい賀状をお送り申し上げる場合に、わたくしの言うべき事が言えないように感じます。すなわち日本語には、尊敬すべき年令に相当する愛情、尊敬および信任を、わたくしどもの<sup>あら</sup>粗い西洋のどの国語におけるよりも優美に表わす多くの美しい言葉があるとわたくしは考えるからです。そこで先生が、一時西洋でも、人生の極度であるといわれた「二十の三倍と十」の尊き年齢に達せられたことについて、今日祝賀しているところです。

しかし、わたくしが殆ど知らない色々の儀礼に巧みな人々は、先生自身の巧妙な国語で言えることを申しませう。そこで、わたくし自身の下手な西洋風で、わたくしの考えと願いを書いてみることにいたしましょう。つぎのように。

秋月先生、わたくしは熊本に来ました時に、どの他の先生よりも先に先生に会いました。そしてわたくしは先生に、話ができなかったが、わたくしの心は先生を理解して先生を愛しました。それからさき、すべての季節、すべての天気、わたくしは先生が学校へ来られ、また帰られるの

を見ました。毎日教えにおいでになる時、いつでも、わたくしどもの銘々に、いつも親切な<sup>あいさつ</sup>挨拶と、すべての生徒にやさしき微笑と、先生の通路に居るどんな者にもやさしい言葉とうなずきを与えて、決して疲れた風や、不機嫌な様子を表わされないことをわたくしは見っていました。このことは、わたくしには甚だ愉快でした。そのことそれ自身ばかりのためにはなく、また、わたくしが疲れたり、元気がなかったり、あるいわ雨の日やひどく寒い日で、不機嫌であったりした時に、よい教訓となったからです。そんな時に、わたくしは自分に申します。「ここに、わたくしども一同に対する先生、決して疲れない先生、そしてその人の魂はいつでも楽しそうな先生がある。どうして、わたくしは不平がいえよう」そして、先生が、この通り寒い朝、教室へお入りになる時、先生は、わたくしども一同に対して、快活と暖かさをもってきて下さったようでした。その暖かさは、いつも余りよく燃えていなかったわたくしどもの採暖用の火より、もっと暖かでした。

それから、わたくしは、先生たちの宴会で、先生を見ました。先生が出席なさると誰でも愉快になります。そして先生は最も若い人と同じような若々しい心で、その楽みを共になさいました。そこで今、わたくしどもは、七十才の今日、強壯で元気な先生を見て、一同尊敬崇拝すると共に、また、子供がその父を愛するように愛します。そして、わたくしの願うところは、将来長く、この日が繰り返えし帰って来ることを、先生が、また、他の新しい先生たちと引き続き教えて下さるように長生きして下さることを、それからまた、新しい時代の生徒の敬愛を得られることをであります。それで、これだけの願いと希望をもって、わたくしは、ご健康のために、祝盃をあげます。

“東の国から”の中で……秋月氏は、次第に齢を加えて、高齢となり、だんだん神さまのような風采を呈してきた。いったい日本の神さまというものは、絵だの彫刻だのみでみるというと、仏さまにまるっきり似ているところがない。神は仏よりも、年代はずっと古いものであるが、この仏よりもずっと古い神たちは、仏さまみたいに、うつむいた目つきだの、寂然と無念無想にふけている姿などは、どれもしていない。神というものは、自然をこのうえもなく愛するものであるから、自然のうちで最も静かな所へも入っていくし、樹木の精ともなるし、あるいわ、海や川に入って、波の音、せせらぎの音ともなるし、また、時には風によって、<sup>あまか</sup>天翔けるようなこともある。大昔は、神は、この地上で、人間と同じようにして住んでいたものなのである。そうして、この国の人たちは、いずれもみな、そういう神の子孫なのである。であるから、この国の神は、神霊としても、人間にだいぶん似たところがあって、さまざまの性質をもっている。つまり、神というものは、生きている人間の感情でもあれば、意識でもあるのだ。伝説のなかや、もしくは伝説から生まれた美術品などに、あらわされているこの国の神は、たいてい、人に親しみをもたれるような姿をしたものが多い。(中略)

かりに諸君が、それなら、ごく普通に見られる伝説的な神の姿というのは、どんな恰好をしているかと聞くとしたら、それにはこう答えたい。それは、「長い、白いひげをたらし、白装束に白の束帯をしめ、非常に柔和な顔をした、始終にここに笑っている、高齢の老人だ」と。

秋月老先生は、ぶだんしめておられる帯が、わずかに黒ちりめんであるだけで、先日わたくしの家へたずねて見えたときなども、まるでその風采は、神道の神の姿にとんと生きうつしに拝見された。そのまゝに、学校で顔をあわせた時に、先生は、わたくしに言っておられたのである。「承れば、お宅では、おめでたがあたりだったそうですね。つつい伺わなかったが、これはわしが年をとっておるとか、お宅が遠方だとか、そういうわけでは、決してないので、実はこの頃しばらく不快でおったものだから。いやしかし、いずれ近日中に伺います。」そういう訳で、ある日、天気の良い日に、老先生は、くさぐさの祝いの品を、ご持参で、わざわざ、たずねて見えたのであった。(中略)

それにしても、万事が、なにか一場の楽しい夢みたいであった。老先生が、ただ目のまゝにそうしておられるということが、そのことがすでもう、一つの喜びであり、頂戴した盆梅のかおりは、なんだか、高天が原からでも吹きかよってくる息吹きのような気がした。やがて老先生は、神さまがこの世にあらわれて、また、消えてゆくように、にこにこしながら、帰って行かれた。いっさいのものを祓い浄めて。

老先生から頂戴した盆梅は、すでもう花はない。再びそれが花さくまでは、また、ひと冬を越さなければならぬ。けれども、客のいない、がらんとした客間には、いまでも、馥郁とした香ばしいものが残っているような気がする。おそらく、それは、ただただ、あの神神こうこうしい老人の思い出のせいなのであろう。あるいわそれとも、あの日、老先生が入ってこられた後から、太古の世の、みたま壺でも——過去の世の女神か何かの姿を見せずに、わたくしわたくしの家の闕をまたいで入ってきて、老先生がわたくしに好意をもって下さったのを縁に、そのまましばらく、この家にとどまりますのでもあろうか。と。

ハーンは、また。「秋月氏は会津藩の高禄の士であった。若くして信任厚く、権勢の地位にのぼった。藩兵の長となり、諸藩の間の談判に奔走し、藩政にも与り、封建時代の武士のやることは一通りみなやった。軍務政務のひまな時には、人を教える仕事をしていた人であった」とその経歴を述べている。明治23年に67才で熊本第五高等学校において漢文を教えて、熊本には5年間いた。72才で職を去り後77才で、東京にて没したとのことである。

1893年(明治26年)4月13日チェンバレン教授に。

今日ここに式が一つありました。それでわたくしも幾分この人が好きになりました。学校に、天保生まれのよい老人——維新の頃に有名であった人がいます。秋月という人です。今日はその人の70の誕生日です。漢文の先生です。ところで教師生徒一同でこの人のために宴を開いて演説をしたり、その他にも甚だ美しいことをしました。生徒はこの人の油絵の肖像を描かせ食堂に、運びました。これが皆よかったが、やがて、こんな愛すべき老人はいなくなるでしょう。頭の中には、山高帽と紙巻煙草と玉突きのことしかない遅鈍な遊戯好きな青年ばかりしかいなくなるでしょう。

同年同月19日 同教授に。

先日あの老先生の祝賀会は中々よい会でした。この人の祝いに多くの漢詩が作られた。それから老人自ら作った詩が厳肅に吟ぜられた。翌日使者が、わたくしのところへ、老先生の漢詩を、金字で書き入れた磁器の酒盃をもって来ました。わたくしは、その宴会へ酒を贈りました。しかしわたくしは、その時の情緒が少しも分らない。天国へ行っても分らない。すなわち、わたくしの魂はその同類の所へ、さまよい戻るに相違ないから。私は、わたくしをその極楽には入れてくれないでしょう。わたくしは理解しないから。

#### 熊本での住所

前述したように、ハーンは1891年（明治24年）11月15日（日曜日）松江の山河を後にして、19日に新任地熊本に到着した。熊本市手取本町の不知火館という旅館に、6泊した後で、25日に同町34番地の赤星晋作氏の家を借りて住んだ。熊本第五高等中学校に付属の外人官舎があった。漢学の秋月胤永は、この官舎に入ったが、ハーンは日本間がなかったため、この官舎に入らずに、純日本風の家に住むことにしたのである。彼は日本式の神棚を注文して室内に安置し毎朝この神棚に向い拍手かしてを打って礼拝してから人力車で学校（現在の熊本大学法文学部がある場所）へ通ったということである。ハーンがこの家に居住したのは、明治25年11月までであって、それ以後は、外坪井西堀端35番地（西外坪井町35番地）である。西隣にフランス人の宣教師が来住し近くに天主教会ができて朝夕の礼拝の鐘がハーンにとって辛棒できないものであったことが西堀端への転居の理由であるということである。前述のように、幼時ヨーロッパで受けたローマ旧教のきびしい教育から味わい続けたにが苦い経験から、カトリックに対しては生理的な嫌悪感を持っていた。

熊本でハーンが住んだ西外坪井の家は早く解体されてしまった。手取本町のそれは所有者赤星氏が居住していたが、昭和35年秋になってその家屋敷が隣接の鶴屋デパートの駐車場として買収された際、その家屋が取り払われることになった。地元有志は、熊本日日新聞社小崎邦弥社長を会長に、事務所を同社に置いて“小泉八雲旧居保存会”を発足させ、地元住民および五高出身者からの寄付金150万円を以って、旧居を現在の八雲公園内に移した。この時熊本市教委社会教育課が協力し、建物は鶴屋から無償で譲り受けた。（熊本市手取本町・八雲公園内・小泉八雲熊本旧居保存会刊行“熊本における小泉八雲”）。（未完）